



放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センター だより



ふくしまの環境再生の情報を伝える 環境再生プラザ



環境再生プラザは除染情報プラザの名称で平成24年に福島市に開所しました。平成29年3月末に、計画に基づく福島県内の面的除染がほぼ完了し、環境再生や環境回復に関する情報発信が重要となってきたことから、同年7月に名称を変更しリニューアルオープンしました。施設内の常設展示等を一新し、これまでの除染の包括的な情報、放射線、中間貯蔵、ふくしまの環境回復の歩み等に関する情報発信を行っています。

——オープンから現在に至るまで、幅広い取組みによって、ふくしまの環境再生に関わる様々な情報を発信されていますが、その際に心がけていることや工夫していることはありますか。

一般の方に説明をする際、これくらいは知っているだろうと決めつけて話をしないことを徹底しています。展示物や教材等を製作する際にも共通して言えることですが、子どもから大人まで皆さんがわかりやすいものをモットーに情報をお伝えしています。

——放射線や除染等、日々の生活の不安や疑問について相談を受けた場合、どのように対応されていますか。

私たちは主に教育や学習等を通じて情報発信をしていますが、もう一つの役割はカウンセリングだと考えています。対応をマニュアル化せず、一つ一つの状況に応じて相手の気持ちと向き合い、疑問に答えることが大切だと思います。リスクコミュニケーションにおいては傾聴が重要ですが、噂などによって事実と異なる認識をしている方がいた場合、理解してもらえぬまで意見を交換し合うこともあります。また、知らないことを質問された場合、一緒に調べたり、お互いに考えたりすることを心がけています。

——その場の状況に適した対応が大切なのですね。相談対応をしていくなかで不安が解消した事例はありますか。

不安が低減されるように最善の努力と準備をしていますが、人それぞれ不安の内容や程度も違い、なかなか全ての不安を解消するのは難しいです。私たちと話をすることはゴールではなく、むしろ興味を持っていただくきっかけであり、スタートだと考えています。一つの事例として、過去に一度お話をしたことがある方に再会する機会があり、それまでは福島県産の米を食べることを避け

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより

ていたが、話をしてから食べるようになったとお聞きした際は嬉しかったです。

—きっかけ作りも重要だということが分かりました。学校での放射線教育もされていますが、小中学生向けにはどのようなコンテンツがありますか。

環境再生プラザで製作した冊子や紙芝居、かるた、ワークシート等を提供しています。学校教育の中の年間2～3時間という限られた時間で、できるだけ親しみを持ってもらい、印象に残るようオリジナルキャラクターを登場させるなどの工夫もしています。学校との事前の打合せで、内容やわかりやすさなどを確認し、発達段階に合わせて対応をしています。

—福島県外の活動において、住民の方に知ってほしいことや、今後取組んでいきたいと考えていることはありますか。

風評被害の払拭や除去土壌等の問題など、社会的課題に対し、環境再生プラザが役立てることがないか考えていきたいです。また、風評被害に関連して、震災から時間が経った現在では、マイナス面の少なさを示すより、プラス面を押し出していく方が良いように思います。例えば、県外に住む方々に福島県の食品や観光の安全性をこれまで主にPRしていましたが、美味しい、楽しいといったPRに変わっていくことが大切だと思います。

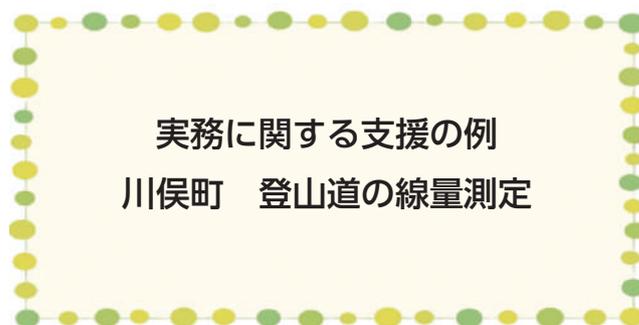
—プラスの情報を正しく発信していくことは福島県内においても大切なことですね。

放射線や原子力発電所の事故に起因する課題はまだあります。福島県の人々が不安と闘いながら、勉強し、考えてきた“経験”のプロセスの中に環境再生プラザもあると思います。

現在は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインでの専門家派遣等も対応しております。環境再生プラザのホームページもご覧

いただき、是非お気軽にお問い合わせください。

—リスクコミュニケーションの在り方や考え方等、大変勉強になりました。本日はありがとうございました。



実務に関する支援の例

川俣町 登山道の線量測定

川俣町役場産業課が主催する「川俣町里山おもてなし案内人養成講座」において、町内の山の現在の放射線量と過去の測定結果を比較しながら、山の現状や登山をした場合の体への影響等について話してほしいとの要望があり、9月8日に現在の放射線量を調べるため、福沢羽山登山道の線量測定を行いました。



福沢羽山はマツやクヌギ、ミズナラが自生する標高約600メートルの山で、当日は里山案内人の引率のもと、産業課職員に同行し、測定ポイントを回りました。放射線量の測定は、過去の測定場所、測定方法に習い、登山口や山頂付近等にてNaIシンチレーション式サーベイメータを用いて行いました。また、支援センターのスタッフはD-シャトル

を身に付け、登山開始から下山するまでの1時間ごとの個人被ばく線量を測定しました。今回はどの測定ポイントにおいても、前回の測定結果よりも低い数値が計測されました。



福沢羽山の中腹部には、木々の合間から川俣の町並みを一望できるスポットがあり、その美しい景色から、地元の方々が山登りを愛する理由が垣間見えたように思えました。

住民セミナーの例

田村市立芦沢小学校 放射線教育

9月10日、田村市立芦沢小学校にて、公益財団法人原子力安全研究協会の山田孝一先生を講師に迎え、1年生から4年生を対象に放射線教育を行いました。

1、2年生は、まず紙芝居で放射線について学習しました。児童の皆さんは熱心に耳を傾け、読み手からの問いかけにも積極的に答えていました。紙芝居の後には電子霧箱を用いて、放射線の飛跡を観察しました。ときには背伸びをして中を覗き込むなど、大変興味深く観察をしていました。最後はクイズで学んだ内容の復習を行いました。正解が発表される

と歓声が上がると、楽しみながら学ぶことができている様子でした。



3、4年生は、はじめに講師から放射線の性質や身の回りに存在する放射線についての講義を受けました。その後、グループに分かれ、校舎の外に設けた4か所の測定ポイントで放射線量を測定する実習を行いました。測定ポイントごとに1分間の測定を行い、その結果を記録しました。どのグループも自ら考え、進んで参加している姿が印象的でした。測定実習の後には、それぞれのグループの測定結果と日本各地の放射線量を比べて気づくこと、わかることについて発表を行いました。



児童の皆さんからは「放射線は量が多くなければ安心してよいことがわかった」、「放射線は元々宇宙ができたときからあったものだわかった」等の

感想が挙げられました。また、学校の先生から「実際に測定器を使って放射線を測ったことはよい体験になった。身近に放射線があることを知り、測ることで安心につながることもわかった」との感想もありました。児童の皆さんには、放射線について正しく知ってもらうよい機会となったのではないのでしょうか。

実務に関する支援の例 浪江町 学校備品の線量測定

浪江町教育委員会より、来年4月に閉校する町内の小中学校5校で使用していた備品を希望者に譲渡することを検討しているため、物品の放射線量を測定したいとの要望を受け、8月31日、9月1日、9月7日の3日間にわたり、実務に関する支援として線量測定を行いました。



学校備品の線量測定は、GM管式サーベイメータを用いて一つ一つ行い、3日間で計536点の備品を測定しました。今回測定をした備品は全てそのまま持ち帰っても健康影響がない程度の低い数値でしたが、同行した専門家から「少しでも不安がある場合は、表面に積もった埃に放射性物質が含まれてい

るため、濡らした雑巾等で拭き取ることによって放射線量は少なくなる。持ち帰る前に埃を拭き取って、使用した雑巾等はビニール袋に入れて廃棄物処理場へ持っていく等、適切な処分をしてほしい」との説明がありました。



今回訪問した小中学校5校では、今年7月に見学会が開かれ、解体前に思い出の詰まった校舎を一目見ようと卒業生や地域住民が集まりました。来訪者の方々は震災当時のまま残っている学校の様子を見て大変懐かしんでおり、備品を持ち帰りたいとの声もあったことから、安全であることを確認した上で譲渡すると伺いました。思い出の品が卒業生の手元に届いたり、地元の方に再利用していただいたりすることを大変嬉しく思います。



放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.24

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6
いわきセンタービル5階、6階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

